



報徳神社の保存修繕と 琴似神社の??

琴似の街の鎮守の神様には、あまり知られていないことがいくつもあります。現在修復中の初代の社殿にまつわる「あんな話こんな話」をまとめてみました。

(文責・事務局長
永峰 貴)

「琴似神社」の二つ目の鳥居をくぐった先には、神門があります。この材は、かつて、伊勢神宮で使用されていたもので、当時の札幌神社が譲り受け、後に琴似神社が再び譲り受けて神門を造作したという由緒あるものです。その神門の先には、正面に現在の社殿が鎮座しています。厳かで、気品あるたたずまいで、それに魅了されてか、参拝される人の姿が途切れることがないのです。

現在の社殿は三代目の社殿で、その左奥に見えている屋根が二代目の社殿である「祖霊殿」です。長沼昭夫氏が令和元年から改築を始め、令和2年8月に竣工していますので、正確には二代目の二代目ということになるのです。

本殿に向かって、右手手前にある社殿が「報徳神社」で、現在は保存修繕の工事中です。実は、この社殿が初代で、仙台藩巨理伊達家の祖伊達藤五郎成実を祀ったのが始まりです。成実公の忌み名である武早智雄神から「武早神社」と名付けられて、山の手2条1丁目の「日登寺」の境内に誕生したのです。

そして、明治30年に、鎮座地を山の手5条1丁目水上通り入口に移して、拝殿を増築して名も「琴似神社」と改めたのでした。それまでの巨理出身の屯田兵の神社から、琴似の村全体の鎮守の神様となったのです。

それから18年後の大正4年に、かつて練兵場であり、養蚕室の建ち並んでいた授産場跡の現在地に移転したのです。中隊本部のあった向かい側ですから、琴似の村の鎮守の神様としては、最もふさわしい所と言えました。

社殿が現在の物に建て替えられ、現在の配置となったのは昭和28年のことでした。この時、やや傾斜していた土地に現在の社殿の裏側から土を掘り起こして盛土を行いましたから、裏側には大きな穴があいていました。冬になると、そこでスキーができるほどの大きな穴でした。子どもたちは、「神社裏」と言って、冬はスキーを、夏はチャンバラごっこを楽しんだものでした。その神社裏の大きな穴は、琴似町が札幌市と合併した昭和30年に琴似本通りが舗装され、その時の土で埋め戻されましたから、もう穴はありません。琴似本通りの舗装工事は、札幌市となった最初の公共事業であったのかもしれない。

上の写真の中央に、「古殿地」と記された標識があります。そこが水上通りから移ってきたときの本殿のあった場所でした。新しい社殿に向かおうとすると、かつての社殿のあった上を踏みつけてしまうことになります。それを避けるために、松を植えたのです。杉の方は境内の杉から自生したのです。今や見上げるほどに大きくなりました。



報徳神社

「ここに、かつて社殿があったんだよ。」って知らせているのです。素敵な配慮ですね。

さて、その「琴似神社」ですが、いったい何が創建なのか、はつきりしていません。それで、神社では、屯田兵がやって来た時に、遙か伊勢神宮や故郷の地に向かって遙拝していたであろう……ということ、来年を「琴似神社の150年」としているのです。はつきりしていないのは、創建時代にはありません。初代の社殿である「武早神社」が、いつ「報徳神社」と改称したのか？それはなぜなのかについても謎に包まれたままなのです。

そんなときに、琴似屯田子孫会の伊藤藤一会長が、「報徳神社」の保存修繕を申し出られたのでした。年月を経て傷みが出てきたからでありました。こうして、入村150年を前に、この春から保存のための解体と修復の工事が始められています。



発見された寄附者名の書かれた記録板(琴似神社提供)

棟上げ時の記録は残っていないか

解体に当たって期待したことは、社殿棟上げの時に取り付けたであろう書付が見つかることでした。それが残っていると創建の年が判明するのですが、残念ながら見つかりませんでした。

ところが、後日、解体と分解、そして、洗浄が進む中で、何かが書かれているらしい板の切れ端が見つかったのです。元は一枚の板であったであろう物が割れていて、その上、一部欠損していたのです。三枚に分かれて、三枚所の板の隙間を埋める材として使われていたということでした。洗浄してみると、墨で書かれた文字が浮かび上がってきたのです。

右端に、「寄附□人名」とあり、続いて、寄附金の額または材料と寄附した人の名前が記されていたのです。寄附された方の数は34名でした。牧野清作・齋藤繁三郎・千田林助・真柳六藏・羽田文五郎といったおなじみの名が並び、苗字の欠損している一名を除いて、そのすべてが巨理系であると思われる方たちの名前でした。巨理出身の屯田兵またはその身内の方と思われるのです。予想通りの結果でした。

びっくりしたことは、その中に、唯一屯田兵ではない人物がいたことでした。その人の名は田村顕允。何と巨理伊達家の御家老です。北海道移住にあたっての中心人物で、殿と一緒に有珠に移住していますから、屯田兵ではないのです。かつての部下たちが、成実公の御魂を祀る神社を建てるということで、貳圓寄附しているのです。部下を思う御家老の優しい心が感じられてうれしくなったものでした。



巨理伊達家家老田村顕允

□七年とは、いつの事か?

34名の寄附者の中には、お金の他に、上等の栓角とか槐材を寄進したと判読できるものが4件ありました。そこには、□七年という年号とおぼしきものが記されているのです。その七の上の□の部分に欠損しているのです。寄附者名の書かれたこの板は、元は、「武早神社」のどこかに打ち付けられていたものであろうと思われるのです。それが、部分的に改装したときに、はがされたのでしよう。その時に破損し、一部が破棄されてしまったのではないのでしょうか? この□七年とは、いったい、何時のことなのでしょう? 探ってみることにしました。「武早神社」は、故郷の「巨理神社」から巨理伊達家の祖である成実公の御分霊をいただいてきたことに始まります。その「巨理神社」の創建は、明治11年。『巨理町史』によると、分霊を琴似に移したのは明治20年ということですから、この□七

年というのは、明治27年とか37年ということが考えられます。しかし、「日登寺」にあった「武早神社」を明治30年に水上通りに移転させているのですから、37年ではないということになります。とすると、明治27年ということになるのかな? と思ったのですが、7年間も社を建てずにいただろうか? 長すぎはしないだろうか? と、思案に暮れるばかりでした。

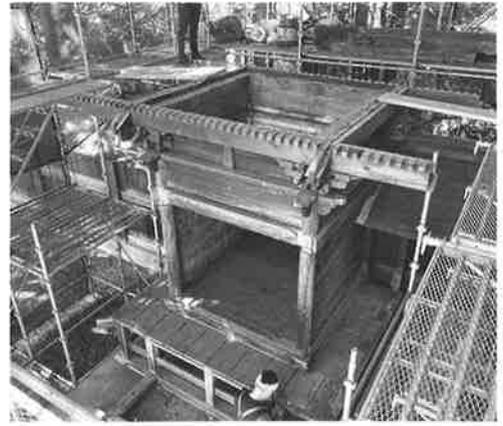
そんな時に、ひらめいたことがあります。明治20年とは、西南戦争の10年後。西南戦争は、語呂合わせで「イヤナナミダの薩摩兵」。つまり「1877年」です。その10年後ですから、1887年ということになるのです。

この□七という数字が、まさか西暦であるとは、考えてもいなかったことでした。

これだと見事に一致するのです。「巨



改修工事中の報徳神社 令和6年5月



改修工事中の報徳神社 (琴似神社提供)

理神社」としても、社殿がまだ存在していないうちに御魂を移すことを許可しないでしょう。出て来ないまでも、その見通しがあったからこそ、それを許したと考えるのが自然ではないだろうか…と考えていた時、思ってもいなかった情報が飛び込んできました。何と、有珠へ移住した巨理伊達家の当主伊達邦成公と家老の田村顕允が、共にクリスチャンであるというのです。伊達邦成公は明治19(1886)年に洗礼を受けて日本基督一統教会の信徒となっていたのです。明治20年に巨理神社から分霊をいただいでくる前の年のことでした。

そして、田村顕允も同じ年に殿と同じ教会で洗礼を受けていたのです。次いで、翌20(1887)年9月に、「紋籠教会」現在の「日本キリスト教会伊達教会」を設立していたのです。したがって、クリスチャンであったならば、□七年という年号が西暦であることの違和感はぐんと少なくなるのです。ということから、「琴似神社」の創建は、明治20(1887)年と言っているのではないのでしょうか。大きな謎が解けた！と思えました。

報徳神社という名の由来

次なる疑問は、「武早神社」が、なぜ？そして、いつ「報徳神社」と改称したのか？そもそも「報徳」と名付けた由来は何か？ということでした。まず、「報徳神社」と改名した時期については、『琴似町史』に記されており

ました。それによると、「昭和22年の春、不要になった琴似小学校の奉安殿を神社境内に移し、これに開拓功勞者の霊を祀り、更に忠魂碑も境内地に移して、靈殿という名で奉齋し、25年5月に琴似神社の末社として報徳神社という



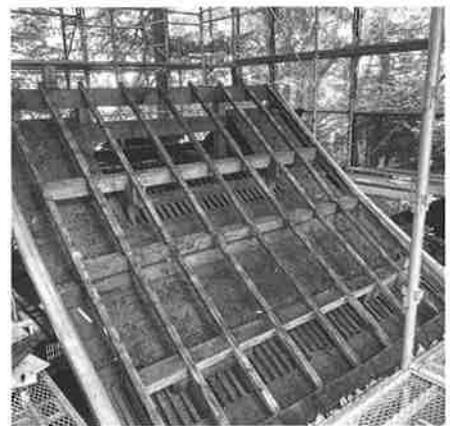
日登寺

社号をおくられた。」とありますから、戦後の昭和25年に開拓功勞者の霊を祀ったことによるということでした。また、こんな記述もありました。

「相当腐朽していたので、昭和2年齊藤英吉、吉田初吉、尾山直三郎の諸氏が私費を投じて社殿の修築と神饌所の増築を行った」とありますから、このときに、先の寄附者の書かれた板が取り外されて、三か所の隙間を埋める材料として使用されたのではないかと推測できそうです。

ある時、どうして「報徳神社」というのかという質問を受けました。今は、報徳神社という名前であるということ、その由来について気にはいかなかったのです。質問されて、改めて思いついたことがあります。

そもそも、旧国道5号線沿いにある日蓮宗の「儀徳山日登寺」は、巨理出身の屯田兵東山源八郎が、入植した年の明治8年に、元村の「妙見堂」を貰い受けてきて、翌明治9年にその材を使って建立したものです。その元村というところは、幕末の慶応元年(1865)年に大友亀太郎が「蝦夷地開拓掛」として入植し、「御手作場」を開いたところでした。「大友掘」という現在の「創成川」の元を造った、あの大友亀太郎のことです。その大友亀太郎は、相模国足柄下郡の生まれです。現在の神奈川県小田原市の出身なので



改修工事中の報徳神社 (琴似神社提供)

す。相模国小田原と言えば二宮尊徳(二宮金次郎)です。亀太郎は、その二宮尊徳に教を請い、門下生として農村復興政策と言われる「報徳仕法」を学んでいるのです。

報徳思想を学んだ亀太郎から「妙見堂」をいただいできて、その材で「日登寺」ができたのです。「武早神社」はその「日登寺」の境内に誕生したのです。その時は、巨理衆のための神社でした。それが、「水上通り」に移って、「琴似の村の鎮守の神様」へと育っていったのです。そして、戦後の昭和25年、開拓功勞者の霊を祀り、更に、「忠魂碑」も境内地に移されて、「琴似神社」の「末社」となったときに、「尊徳ゆかりの日登寺の中に誕生した神社」であったことから、「報徳神社」と命名されたのではないだろうか…というのが私の推論です。